まどさん

阪田寛夫

まどさん

阪田寛夫

新潮社

まどさん

著者　阪田寛夫（さかた ひろお）

昭和六十年十一月五日　印刷
昭和六十年十一月十日　発行

発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(03)二六六一五一一一
編集部(03)二六六一五四一一
振替　東京四一八〇八番

印刷　三晃印刷株式会社
製本　大口製本株式会社

定価　一一〇〇円

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Hiroo Sakata Printed in Japan. 1985

ISBN4-10-360401-8　C0093

まどさん／目　次

まど・みちを　7
ぞうさん　13
どこから来た　29
空の匂い　48
工業学校土木科　60
まどさんの恋　72
にじみ出す液　79

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かみさま 88
聖潔（ホリネス） 103
鳥の視点 128
戦中日誌 151
おかあさん 169
どこへ行く 195
あとがきにかえて 202

装幀／秋山巌

まどさん

発表誌『新潮』昭和六十年六月号

まど・みちを

子供の時からの名前ではない。今から五十年ほど前につけた筆名だ。まだ詩人が一目みれば詩人だと弁別できた時代の名残が、ひらがなの配置や真中の点あたりに漂っている。戦後、新仮名遣いに従って、まど・みちお。これで普通の人なら、いい歳をして浪漫的な名前をつけて、と思われるだろうが、まどさんのことを、

「まどさん」

と呼んでも恥かしくない。ふだん何気なく呼んでいるものの、よく考えるとふしぎなことである。関西弁では、まどのどにアクセントが来るが、この人の名は、まを高く、いつも一拍で、まどさん。

たとえば昭和五十九年、すなわち一九八四年秋の真昼の新宿で、横断歩道を渡りかけていた雑踏の中にまどさんのかがんだ背中をみつけて、うしろから「まどさん」と呼んだら、振返ったまどさんは、一寸恐縮した表情で眼を伏せて、わざわざあと戻りをした。まわりの人々に較べてみて、本当は背が高い人だということに、この時初めて気がついた。長い付き合いなのに、迂闊な

ことである。私はまどさんを小さな人だと思いこんでいる。或いは思いこまされていた。
色つきの開襟シャツを着ているが、何色だったかいつも思い出せない。大き目の綾織の上衣。細身のズボン。茶の運動靴のようなものを穿いている。ズボンが細いのはおしゃれのせいではなくて、昔のものだからか。そのように思いたくさせてしまうものがまどさんの内側にある。いま、外側から一寸みて、まどさんのことを詩人だと見抜ける人はいまい。
二十数年前から年に二、三度は会ってきながら、本名を石田道雄と知ったのがやっと五年前だ。私も迂闊だが、先方もよほど宣伝嫌いの人らしい。
「お変りありませんか」
そう言って七十何歳のまどさんの方から先に、先生に出逢った子供のように古いピケ帽をとって急いで頭を下げた。むかし初めて会った時と、態度も服装も変っていない。二十何年間、顔もそのままだ。その顔を見ていると、「まど」という姓が日本の南のはずれの島に昔から代々伝わってきたような気になるのだった。
「兵隊の時のノートは、間もなくお返しできると思いますが」
と私は言った。借りてから、もう一年以上になる。
「私の方はいいですよ。どうぞお仕事が終るまで持っていて下さい」
まどさんの童謡だけを知っている人がこの場に立会ったとすれば、その言葉づかいが、ずいぶん年下の者に対しても、隅々まで丁寧であることになるほどとうなずくと共に、その声が意外に甲高いのに驚くかも知れない。
以前は気軽に声をかけにくかったが、実は六年前から私はこの人に出逢うごとに、まるで親の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

敵に出逢ったように傍に寄って行って、何かと話を聞きだすようになった。まどさんには迷惑この上もないことだと思うが、そのうちもっと度が進んで、ノートをひろげて話を書きとるようになった。

許しを得て談話を書き取った最初の日に、家の前の道路にホースで水撒きをして、誤って人にかけた時の体験が語られた。藪の向うが坂道で、登ってくる通行人にはそこが死角になるために、きわめて慎重に撒いていたにも拘らず、音もなく出て来た自転車の乗り手に水がかかってしまった。まだ自宅のまわりに藪が残っていて道路も舗装されていなかった十年も前の話らしい。まどさんのホースの水を浴びたのは、シャツは着ているけれどもボタンははめていない、ならず者のような人物で、その怒り方が、

「つめたいじゃないか」

の一点張りだった。真夏の午後のことで、つめたいじゃないかという怒り方では却って威嚇の力をそぐことになるほど暑い日だったから、まどさんはあやまりながら、あまりにも下手な相手の言い分に、代って怒ってやりたいと思ったほどだった。ところが丁寧な言葉でひたすらあやまっているまどさんが、実はこんな工合に心中相手を侮っていることを、先方は敏感に察するセンスのよさがあって、一層居丈高に、しかもなお他の事は言わずに、

「つめたいじゃないか」

の一本槍で怒り続けた。怒り続けることで、まどさんを圧倒した。

それに関連して、まどさんはインターヴューの受け手として最近発見した現象に言及した。メモをとる人が女性であった場合に、面白い現象がありますと言う。即ち、あとで送ってくる新聞

や雑誌を見ると、自称の「私」が大てい「ぼく」になっている。語尾の「です」が、女性記者の記事だと必ず「だよ」に変えられてくる。丁寧に話しているのに、ぞんざいな言い方に書かれている場合が再三ならずある。男性記者の場合はそれがない。というのは女性の方が真相を見抜いているわけで、自分がきれいごとを言っても、彼女たちには内心の不遜を感じ取られてしまうのだ。女性として無意識に感得しているものが、記事の中でぞんざいな言葉となって現われるのだろう。ではなぜ自分はきれいごとを言ってしまうのか。それには理由があって、……

その理由についてはあとで改めて触れることにする。私は男性でありながら、今後まどさんの話を謙譲語ぬきでまとめる場合も出てくるだろうが、少くともそれは話し手の内心の不遜を感じるゆえではない。「つめたいじゃないか」と怒り通したならず者のようには、とてもまどさんをとらえることはできない。

「身長は何センチですか」

雑踏の中で、適当な喫茶店を探しながら、私は今まで聞き落していた大事なことを訊ねてみた。

「百六十五です。女房も同じ背丈でしたが、この間二人で温泉宿に行った時に身長計があったので交替で測ったら、私は一センチ縮んでました。ところが女房の方は三センチ縮みました」

百六十五センチなら、昔は平均より少し高い目だ。

「体重は？」

「終始四十六キロから八キロくらいです。勤めていた頃は五十二キロまでなったかも知れませんが」

まどさんが戦後数年たって幼児向け絵本雑誌の編集を始めた時代の写真がある。鉄道博物館へ

取材に行った時、同行した写真家でのちに高名になった人が、屋上でまどさんを模型の機関車にまたがらせて写真を撮った。私の知らない四十歳前後のまどさんは、煙草の匂いのしみついたような厚手のアメリカ放出品風の背広にマフラーを巻き入れ、練達の編集者という姿にうつされている。戦争が終って四年目の冬、飛び散る黒雲を背に、秀でた額と油をつけない髪を冷めたい風に吹きなぶらせながら、断固節を枉げない眉根とまなざしが、深く前途を見定めている。こんな目の持主に原稿を依頼されたら、誰もが自分の良心を問われている気になって筆がこわばったに違いない。

もう十年さかのぼって昭和十四年秋の結婚式の写真を見ると、日本髪の花嫁より幾分小柄に見える面長の三十歳の花聟は、羽織袴の着付けのせいもあるが歌舞伎役者の誰かに似ている。琴か尺八、あるいは伝統工芸の道に携わる人のようにも見えるが、この時代は台北州庁の土木技手だった。これらの写真からは、私がひそかに筆名の由来になったのかと想像していた右目蓋の黒子が見出せなかった。

そのまどさんを、「まどさん」と呼んで、私も私の仲間の誰もが恥かしくないのは、恥かしく思わせないだけの気苦労を先方が尽しているからだ。面識のない通行人の目にさえ、まどさんは「まどさん」と映って違和感を起こさせない。この筆名を使いだした当座こそ、「まど」は武井武雄が描くような風見鶏のついた赤い屋根の下のお伽噺風の「窓」だったかも知れないが、現在のまどさんは、山奥にとり残された小学校の小使室の、桜の花型に切り抜いた半紙で割れ目を補修してある硝子窓かなんかになりきっている。なり切っている、とは忍者のようだが、忍者と違うのは七十五年かけて、内側から皮膚の方に向けて徐々に、堅固に、一度も逆行しないでそうなっ

てきた点だろう。素朴な人ざわりだが、何でも見通しの目を持っている。謙遜な心と、ずいぶん気むずかしい感受性が備わっている。そういうことは辛うじて分る。

ぞうさん

前節で「二十数年前」初めてまどさんに逢った、と書いた時の用件は、作詞の依頼だった。私は大阪に電波を流している放送会社の東京支社でラジオの創作童謡の番組を作っており、その年の秋まどさんに初めて作詞を頼んだ。面識はなかったが、子供たちの間に拡がりはじめた童謡「ぞうさん」の作詞者だとは知っていた。念のために、当時会社で作った無料配布用の楽譜を見ると、そのまた二年前の昭和三十二年と翌三十三年に、二度まどさんの歌を放送している。新作を委嘱したのではなく、作曲家の手持ちの楽譜から選んで、新作に準じて短期間の放送権と無料配布の楽譜の出版権を譲渡して貰ったのだ。最初のはこんな歌だ。

ペンギンちゃんが
おさんぽ　していたら
そらから　ぼうしが　おちてきた
サンキュー

かぶって　よちよち　いきました

第二節は空からステッキが落ちてくる。これまた、サンキューと拾ってふりふり行ってしまう。ただそれだけで、それきりなのがおかしい。穴があいたような淋しいおかしさが作曲家（中田喜直氏）の心を誘い出して、事実としてはあり得ない動きや姿を、音のなかで実現させていた。のちのまどさん自身の解説によると、落ちてきた帽子はシルクハットに限るそうであった。

二つめの歌は「おさるの　ゆうびん」という題だった。

おさるの　ゆうびん
きて　みたら

かばさん　ひるねで
ごーう　ごう

おくちを　あんぐり
ごーう　ごう

よんでも　おきない
ごーう　ごう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com